資料１

令和６年度 第１回（6/13開催）新潟県スポーツ推進審議会における意見要旨

大項目	小項目	No	意見要旨
①年齢や競技の枠、経済格差、団体間の格差を超えたボーダレスなスポーツ環境の実現	全般	1	部活動の地域移行を契機として、中学生だけではなく、こどもから高齢者まで、障害の有無に関係ないインクルーシブな環境や、競技志向や楽しみ志向にとらわれず、スポーツ環境（新たなスポーツ環境） を考える良いきっかけになる。
		2	プロスポーツクラブとして、いろいろなスポーツに触れていただく場の提供を、より新潟県オリジナルのようなクロスした体制づくりができると考えるが、指導者や支援体制の紹介・情報提供体制があるとよい。
	こどものスポーツ	3	スポーツを好きなのか(、求めるものや環境、関わり方、考え方)など多角的に集計した小中高アンケート等の基礎資料があるとよい。また、幼児期のスポーツ・運動遊びは重要だと思うので、保護者への啓発や公的機関、民間での取組がありがたい。
		4	幼児期は運動の志向性に影響する大切な時期であり、各市町村の取組が重要。県内を総括している県として、イベントや保育者等への研修会も含め、幼児期の運動遊び、外遊びの大切さをしっかり発信していただくことが大切だと思う。
		5	運動やスポーツが嫌いなこどもの割合が非常に多い。また、運動遊びは好きだが、体育の授業は苦手なこどももいる。こどものスポーツに対する印象や影響は、大人の知識や意識が大きい。こどもにとってスポーツにかかわる機会がいかに大切か、親が学べる場や、体育の授業の内容を家庭でも保護者が一緒に取り組める機会があると良い。
		6	こどもがスポーツに触れる機会が少なくなっている中で、スキー以外のほかのスポーツにおいても、底辺を拡大する取組が必要。こどももきっかけがないと、スポーツをはじめられないので、イベントなどにより、きっかけを増やしていくことも大切だと思う。
		7	地域や経済的格差の問題もあるだろうが、こどもが関心をもつスポーツをスマホ、SNSを使用しながら、検索、発信、参画できる仕組みがあるとよい。
		8	多様なスポーツの体験については部活動の地域移行の中にも入っていると思うが、やはりこどもたちが今までの部活動の種目にはない新たな種目や、体験したことのない種目を体験できるようなイベント等は、大事だと思う。
		9	こどものスポーツや運動経験の環境、豊かさについて、親の経済格差によって差が出てしまうのは問題。誰でもどこでもいつでも、（運動）遊びの環境に接することができれば、将来、自分の健康を支える、運動好きになるこどもを増やすことにつながる。
		10	冬場は家に閉じこもりがちになるので、雪合戦大会等のイベントやスキー場関係の施設等の開放等、雪の活用にも取り組んでいただきたい。
	高齢者のスポーツ	11	高齢者のやりがいづくりには、競技を意識せずに、普段の身体活動の成果を発表できる環境づくりが大切。
	障害者のスポーツ	12	他のスポーツと同様に障害者スポーツもきっかけづくりが大事。地域でボッチャをやったことがきっかけで、障害のある方や、高齢者からこどもまでつながりができたので、今後も身近な地域のなかで、障害者スポーツを進めていきたい。
	アスリート	13	（多様な世代や多様なニーズに対応し、）普及と強化を進めるには、総合型クラブにこれからの可能性があると思っており、普及と強化を一体化して、やっていく必要がある。単一種目ではなく、多様な種目からウインター競技まで同一クラブで幼少期から行うなど、（多様な専門性を持つ方や組織が）チームを組んで進める必要がある。
		14	次世代育成の補助制度や環境構築において、国民スポーツ大会に紐づいている団体をベースにしていることが多いが、スケートボードやダンス、スノーボード等、国スポ種目ではない競技も多い。予算の割り振り等がこれからのニーズなども含め、この新しいスポーツに合う制度になっているか。
		15	スポーツの概念が変わってきており、こどものニーズに合わせて、新しい競技や既存のスポーツの変化も生まれている。オリンピックや国スポ種目の加盟団体に予算配分し、各市町村に支部をピラミッド型につくる必要がある今の形は、少子化もあり、新しい競技団体が対応するのは難しいのが現状であり、スノーボードであれば全日本スキー連盟と一緒にやるような形になる（既存の団体に吸収されていくような傾向）。指導者不足問題やＤＸ促進、コンプライアンスやハラスメントへの対応が進み今の形になってきているが、今こそ、現代に合った形に変えていくときだと思う。
		16	新潟スポーツ医・科学コンソーシアムとして、裾野の広がりとアスリートの支援の両方をみて、医科学支援に隔たりがでないように県医師会等と連携していきたいと思うので、県も同様の配慮の上、取り組んでいただきたい。
		17	スポーツ医科学によるアスリート支援は、成長期の選手の場合には年代を経て成長していくところを見守っていかなければならないため、一定の経費が必要となり、各競技団体の予算規模が問題になる。
		18	スポーツ医科学の施設はオリンピック種目ではない選手が使えないような印象が強いため、いろいろな競技の方が施設を使えるシステムづくりを期待している。

大項目	小項目	No	意見要旨
②地域におけるスポーツ環境の整備・充実	中学校の部活動に代わる地域クラブ活動への移行を契機とした新たなスポーツ環境の構築	19	部活動の地域移行を契機として、中学生だけではなく、こどもから高齢者まで、障害の有無に関係ないインクルーシブな環境や、競技志向や楽しみ志向にとらわれず、スポーツ環境（新たなスポーツ環境）　を考える良いきっかけになる。【再掲】
		20	部活動が地域に移行し、新たなスポーツ環境ができたときには、やはり自走することが大事であり、受益者負担で、必ず指導者にはきちんと謝金をお支払いすることを目指している。徐々にではあるが、そういう方向を示していく必要がある。
		21	多様なスポーツの体験については部活動の地域移行の中にも入っていると思うが、やはりこどもたちが今までの部活動の種目にはない新たな種目や、体験したことのない種目を体験できるようなイベント等は、大事だと思う。【再掲】
		22	スポーツ医科学について一番危惧しているのは、新潟県は非常に広いので、医療の質や提供に偏りが出ること。例えば部活動の地域移行に関しても、受け入れる側の市町村の状況によって医療の内容等の連携がとれなくなるので、偏りがでないように配慮をお願いしたい。
		23	高校の部活動においても競技人口が減少しており、競技人口が少ない競技は合同チームでインターハイに出られるシステムに変わってきている。高体連としても、中学部活動の地域移行後の令和８年度以降を見据え、注視していきたい。
	総合型地域スポーツクラブの育成	24	体育館での教室にとどまらず、アプローチを工夫している総合型地域スポーツクラブも増えている。総合型クラブは二極化しているが、もう少し広い視点で募集する等、取り組んでいく必要があると思う。
③交流拡大や環境問題への対応等、スポーツを活用したまちづくりの取組	全般	25	アスリートの心の健康には、学校教育の一貫としての対応や、環境、観光、障害者の方たちとの連携も必要。横串をさせるような行政の体制も必要だと思う。
		26	観光との連携などを意識して、いろいろな課と連携することが必要だと思っており、新潟の特徴、特色にあったものをオリジナルで作れれば良いと思う。
	交流拡大への取組	27	スポーツは大きな資源であり、一人一人が想いをどんどん出していけば、それはエネルギーになり、人を呼び込むため、非常に魅力的だと思うが、どのような団体が取り組むのかが明確ではない。まとまり（例えばスポーツコミッション）を作る支援をお願いしたい。
		28	自らが新しい視点でスポーツ的なものを生み出していき、それに伴う効果をそれぞれの地域でしっかりと検証して評価することによって、住民の意識が高まると思う。
		29	海外とのスポーツ交流においては、受入団体の脆弱さや競技団体の横の連携が限られていること、施設が限られていること等が課題。受入側の競技団体の横のつながりの強化が受入体制の強化にもつながると思う。
	環境問題への対応	30	アーバンスポーツは環境と密接。例えば、スノーボードでいうと、温暖化が続いていて雪がなくなるとその競技自体がなくなる。サーフィンも南極、北極の氷が解けていくとサーフポイントがなくなってしまうなど、地球問題は密接に関係していることをアスリートに知らせたいし、一緒に考えるということも必要である。
		31	冬場のインバウンド誘客は観光として重要だが、地域住民がスポーツに触れられる機会を設けることも大切。例えば、雪が降らなくなってスキー自体もできなくなっていく危機感をこどもたちに伝えながら、雪を大切にすることをスポーツにつなげていくことや、実際、雪に触れないこどもたちでも、それが水になって自分たちの生活を支えていることをしっかりと伝えられるようなシステムを作り、県として共有していただけたらと思う。
プラン策定全般について		32	次期計画は、県民アンケート以外にもいろいろな要素を持ちながら考えていくということでよいか。